

## 見えないものにこそ、目を留める

【聖書箇所】Ⅱコリント4章18節、5章16~17節、18~21節、ヘブル11章1節

### ベレーシート

●「光」の概念とは何か、それを求めてのシリーズの第3回目です。創世記1章3節の「神は仰せられた。『光があれ。』すると光があった。」という「光」は、私たちの目には見えない「光」です。なぜなら、この「光」は光源としての光ではなく、神が御子を通して、(世界の基が置かれる前から)「あらかじめ定められていた」神ご自身の緻密なご計画、深淵なみこころ、そして神の御旨と目的を含んだ「測り知れない重い事柄」を包含した「光」だからです。まさに、この光は「人の心に思い浮かんだことのないもの」なのです。この「光」は、神が天と地を創造するにあたって、やみの中から呼び出されたのです。

●どんな言葉にも類義語があるように、「光」のような、根源的な事柄を表わす言葉にも類義語が存在します(とはいえ、私たちはそれが類義語であるということを知らずにいることが多いのですが)。前回も、「光」(「オール」 אור)の類義語として考えられるものとして「知恵」(「ホフマー」 חָכְמָה)を取り上げました。はからずも、このシリーズ「聖書における光の概念」のメッセージを始めた時と重なるように、「箴言」の瞑想が始まりました。「箴言」を瞑想して行く中で、そこに登場する「知恵」という言葉が「光」と同義語であると確信したのです。「知恵」といっても、「この世の知恵」ではなく、「神の知恵」です。「この世の知恵」によっては神を知ることはできません。同じ「知恵」(「ソフィア」 σοφία)という言葉を使っていたとしても、「神の知恵」と「この世の知恵」は全く異質なものであり、区別すべきものなのです。それらを混ぜ合わせるなどできません。「この世の知恵」によっては「神の知恵」を悟ることができないという事実、この事実を知ること、実は神の知恵なのです。もしこの世の支配者たちが「神の知恵」を悟っていたら、決してイエシュアを十字架につけはしなかったはずだとパウロは述べています(Ⅰコリント2:8)。「この世の知恵」は「やみの中の知恵」であり、たとえその知恵がどんなに賢く、優れていたとしても、その知恵によっては「光」(「オール」 אור)を悟ることは絶対に不可能なのです。

●「光」についてのさらなる類義語として、「**栄光**」という語彙があります。神の測り知れない「重い事柄」のことを、聖書では「**栄光**」(ヘブル語では「カーヴォード」 כְּבוֹד、ギリシア語では「ドクサ」 δόξα)という言葉で表しています。その「重い事柄」としての**神の栄光の現われ**については、別途、「シャハイナ・グローリー」**として取り扱いたいと思います。**

●「光」-「知恵」-「**栄光**」にはそれぞれ共通しているものがあります。その共通項とは何でしょうか。その一つは、いずれも「**目には見えない**」ということです。そしてもう一つの共通項は、いずれも天地創造の前からあったということです。「**栄光**」の場合、ヨハネの福音書17章にある十字架の前の御父に対するイエシュ



「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

アの祈りの中に、「今は、父よ。みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていました**あの栄光**で輝かせてください。」(17:5)とあります。「**あの栄光**」とはいったい何を意味するのでしょうか。それをあえてことばにするならば、御父と御子との間にある「**永遠の信頼**」ということにならないでしょうか。イエシュアは地上で御父の栄光を現わされましたが、その最後の十字架の出来事において「**あの栄光で輝かせる**」とは、すなわち、天地創造の前からあった「**永遠の信頼が買かれること**」を意味するのではないかと思います。

## 1. 目に見えないものが、目に見えるものを支えているという事実(真理)

●使徒パウロは言いました。「**私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。**見えるものは一時的であり、目に見えないものはいつまでも続くからです。」(Ⅱコリント 4:18)。これはすごい発言です。私たちの多くは、「目に見えるものにこそ、目を留めやすい」者だからです。ですから、「神がいるなら、神を見せてみる」とか、「オレは見えるものしか信じない」「見えないものは信じられない」といった発言を耳にします。しかし、目に見えないものはこの世界に数多くあります。今日、ノーベル物理学賞をもらっている人たちの研究はほとんどが目に見えない分野のものです。ですから、「オレは見えるものしか信じられない」と言う人は、科学も信じられないという偏狭な人(高慢な人)ということになります。ただし、科学のいう目に見えないものと、聖書のいう目に見えないものとは質を全く異にしています。

●上記のⅡコリント書 4 章 18 節前半の原文を直訳すると、「私たちが目を留めているのは、見えるものではなく、かえって見えないもの」となります。「目を留める」という動詞が分詞で使われて主語となり、「見えるものではなく、かえって見えないもの」の「かえって(むしろ)」を意味する強い否定の接続詞「アツラ」(ἀλλά)のニュアンスが、新改訳では「見えないものに**こそ**」という表現で強調されています。つまり、何がここで強調されているかに心を留める必要があるのです。ちなみに、普通の「しかし」に使われるのは「デ」(δέ)です(決して文頭には置かれないのが特徴です)。

●「目を留める」と訳されている動詞「スコペオー」(σκοπέω)は、「～に目を留める、注視する、注目する、見張る、気をつける」という意味があります。「見えないもの」とは、「並はずれた永遠の栄光の重み」をもたらす事柄です(Ⅱコリント 4:17、「新改訳では「測り知れない、重い永遠の栄光」となっています)。そのことに「目を留める」人は、パウロのいう「成熟した人(成人した人)」を意味します。

●今から 8 年以上も前に、「博士の愛した数式」という DVD を観ました。私の心に残る映画となりました。このことを「牧師の書齋」の「**How lovely**」という中に掲載しています。この映画は、数という神秘、つまり素数、友愛数、完全数といったおもしろさを楽しませながら、ある数式を通してとても大切なメッセージを伝えようとしている映画なのです。その内容ですが、交通事故による脳の機能障害のために 80 分しか記憶がもたないという主人公の博士の心が、 $\epsilon\pi\iota = -1$  とする世界から  $\epsilon\pi\iota + 1 = 0$  の世界へと目が開かれていきます。それは主人公にとって、辛い苦悩から心が解放された世界なのです。夜空に光る一条の光が美

しいように、野に咲く1輪の花が美しいように、極めて美しい世界を  $\epsilon\pi l + 1 = 0$  という数式によって表わしているのです。きわめて直観を必要とする映画です。たとえ理性的なことばで説明できなくても、直観によって悟る世界、これが数式の面白さだといわんばかりに・・・。

●ちなみに、 $\epsilon$  (ギリシア語で「エプシロン」の「エ」)はネピア数という無理数でどこまでも続いていく数、 $\pi$  (ギリシア語で「ピー」の「ピ」)は円周率でどこまでも割り切れない数、 $l$  (ギリシア語で「イオタ」の「イ」)とは想像上の数で、決して自分を現わさない虚数。しかもこれら三つは決してつながりをもたない、無関係にしか見えない数なのです。ある一人の家政婦と出会うまでは、永遠の-1としかとらえることのできなかった主人公の博士の人生に、「1」が足されることによって世界が変わるのです。ものの見方が変わり、自分を苦しめていた「-1」が無くなって「0」になることを意味するのです。その「1」とはいったい何なのか、その解釈はその映画を観る者の一人ひとりにゆだねられているのですが、この映画ではその「1」という数が、「ある一人の家政婦」、あるいはその「家政婦とその子ども」だと理解できます。

●私はこの映画を観ながら、視座(ものの見方の座標軸)が聖書の視座にとっても似ているように感じました。使徒パウロのことばで表現するなら、視座が「見えるもの」から「見えないもの」へ移ったと言えると思います。そのひとつの例が映画の中にあります。博士が家政婦に1枚の紙に直線を書かせてこう言います。「考えてごらん。君の書いた直線には終わり始まりがある。だとすると、二つの点を最短距離で結んだ、これは線分だ。本来、直線の定義には端がない。無限にどこまでも続いていかなければならない。しかし1枚の紙には限界があるから、とりあえずの線分を本物と了解しているに過ぎない。真実の直線はどこにあるのか。それは心にしかない。自然現象にも感情にも支配されない永遠の真実は、目に見えないのだ。目に見えない世界が、目に見える世界を支えているんだ。肝心なことは、心で見なければ・・・」

●この台詞の中の「**永遠の真実は、目に見えないのだ。目に見えない世界が、目に見える世界を支えているんだ**」という部分はとてもうなずけます。しかし次の台詞、「肝心なことは、心で見なければ・・・」という部分です。これはいただけません。「心で見ると」ことによって永遠の真実は見えないからです。このことはこの世の知恵の限界とも言うべきところです。この部分は聖書的に言うならば、「御霊によって」としななければならないところですが、そんなことを言えば、ただでも分からないことを、さらに分からなくさせてしまうので、「心で見なければ・・・」となってしまうことは致し方ありません。いずれにしても、この映画は永遠の真実を数式によって表わそうとするユニークなもので、私にとってとても興味深いものでした。

●言葉を換えると、永遠の真実とは、目に見えている世界が目に見えない世界から始まっているということなのです。そのことを教えるために、神はご自身の御子イエシュアをこの世に遣わされたのですが、この永遠の真実はそう簡単に人々には理解できなかったのです。まさに十字架につけられたイエシュアの十字架の死は、人間のこの無知をもちに映し出しているとも言えるのです。

## 2. 信仰とは、目に見えないものを確信させる

●永遠の真実とは、永遠においてすでに定められている神のご計画であり、それが実現することを意味します。パウロが「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。」と言ったのは、彼が常に「見えないもの」が神によって実現することを確信していたからです。このパウロが「**だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ。すべてが新しくなりました。**」ということばを記しています(Ⅱコリント 5:17)。このことばが意味することはどういうことでしょうか。クリスチャンになった人が自分の姿を見て、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者だ」と言うけれども、信じる前と比べて少しも変わっていない。それに「見よ。すべてが新しくなりました。」と言うけど、そんな実感がまったくないと不平を言っていました。そんな思いを持ったことはありませんか。

●「すべてが新しくなりました」という部分を、キリストを信じて教会に行くようになってから、性格が前に比べて少し良くなったように思うといったレベルの話だとしたら、とんでもない誤解です。パウロがここで語っていることは、ものの見方が全く変わってしまったことではじめて知った事柄を意味しているのです。イエシュアは夜に訪問して来たユダヤ人の指導者であるニコデモに対してこう答えました。「まことに、まことにあなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」(ヨハネ 3:3)と。そのことばを理解できなかったニコデモに対して、イエシュアがさらに語ったことばは、「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。・・・」(3:5)でした。「水と御霊によって生まれなければ」とはいったいどういうことでしょうか。

●この箇所にある「水」を「洗礼」のことだと理解している人は多いと思います。確かに、新生を表現するものとして、洗礼が教会でなされてきたからです。しかしこの箇所は、教会においてなされてきた伝統が私たちの目を塞いでいる例のひとつではないかと思うのです。この箇所にある「水と御霊」は、実は神が「光があれば」と言って光を呼び出される前に存在していたものです。創世記 1 章 2 節には「地は荒漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた」とあります。そこにあったのは、**地とやみと大水と神の霊と水**です。この混沌とした状況の中から神は光(=神のご計画、神のみこころ、神の御旨、神の目的を意味する光)を呼び出されて創造のわざをなされ、その創造の冠として人間を造られました。ヨハネの福音書 3 章 5 節では「水と御霊によって」と訳されていますが、「～によって」と訳された部分に、前置詞の「**エク**」(ἐκ)が使われています。「**エク**」(ἐκ)は、本来的には「～の中から」(out of)という意味をもった前置詞です。つまり、「源、原因、起源となっている状況の中から、新たに生まれなければ」という意味です。とすれば、そこをなぜ「～によって」と訳すのが疑問です。この疑問は私とその箇所を原語で見たからです。もし「～によって」(in, by)と手段を表す前置詞として訳すならば、そのギリシア語は「**エン**」(ἐν)でなければなりません。そこをヨハネがあえて「**エク**」(ἐκ)としているのは、もう一度「新しく生まれる」ためには、人が混沌の中から再び新しく造られる必要があるということの意味していると考えられます。ヨハネは原始の混沌の状況を「**神の霊と水**」(「水と御霊」)としているように思われま

す。とすれば、人が新しく生まれるためには、神は創世記 1 章 2 節に戻って新しく創造のわざをなさなければならなかったということになります。神の道理(道筋)として、そのためには神の御子イエシュアの十字架の死と復活が不可欠であったのです。イエシュア(キリスト)の十字架の死と復活は、キリストによる新しい創造における神の必然的な出来事であったということです。それはある一部分を改修、修繕、改良することでは決してなく、キリストによる完全に新しい創造がなされたことを意味します。

●本来、「洗礼」という儀式はこの信仰を表明する象徴的なしるしであったのだと思います。ただイエシュアの時代にはイエシュアの弟子たちが人々に洗礼を授けていました。果たして、弟子たちがその時、洗礼に込められた深い神の秘密を悟っていたのかどうかは分かりません。いずれにしても、イエシュア自身はバプテスマに対して自ら率先してしようとはしなかったようです(ヨハネ 4:2)。それは、洗礼の意味する出来事が実現する神の「時」がまだ来ていなかったからではないかと思えます。

●話を元に戻します。パウロが Ⅱコリント 5 章 17 節で語っていることばのコンテキストを見てみましょう。この 17 節の前の箇所、パウロは「私は今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」(Ⅱコリント 5:16)と語っています。「人」だけでなく、「キリスト」のことも、です。つまり、人の世界のことも、神の世界のことも、すべて人間的な標準で知ろうとはしないという宣言です。「人間的な標準で」とは「目に見える基準で」ということであり、この表現は「この世の知恵」をも含んでいます。考え方の出発点、つまり考え方の視座を人間的なものから神に移すことを意味しています。そうした視座からでないと、17 節の「**だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ。すべてが新しくなりました。**」というみことばは理解できないはず。ヘブル語の修辞法として、今実現していないくても、将来必ず実現する事柄を「完了形」の動詞で表わします。これを「預言的完了形」と言いますが、使徒パウロはこの概念で、ギリシア語のアオリスト時制で表しているのです。

●パウロは、Ⅱコリント書 4 章 18 節で「私たちは、目に見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」と述べた後に、5 章ではこう述べています。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。・・・**確かに、私たちは見えるところによってではなく、信仰によって歩んでいます。**」(Ⅱコリント 5:1~7)。この後に先ほどの、人間的な標準で知ろうとしない」という言葉が来て(16 節)、17 節で「**だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。**」という**信仰のことば**を語っているのです。にもかかわらず、この信仰のことばを人間的な標準で理解しようとする、自分は何も新しくなっていない、新しく感じられないということになってしまうのです。人間的な標準(人間的視点)ではなく、神の標準(神の視点)で考えるということは、神の永遠のご計画の視点から見て、そして、考えるということになります。神の標準は目に見えない信仰の事柄です。ですから、神のマスタープランに対する信仰がなければ、17 節のことばは理解できませんし、またそこに確信と希望を置くことができないのです。すべては神の知

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

恵をこの世の知恵で理解しようとするところに問題があります。サラダにかけるドレッシングはよく振れば混ざったように見えます。同様に、神の知恵とこの世の知恵も、一見混ぜ合わすことができるように思いがちですが、時間が経てば再び油と水のように分離してしまうのです。これが神の視点で考えないキリスト者の姿で、混乱を引き起こす要因ともなっているのです。

●神の視点で永遠の神の事柄を知るためには、信仰が不可欠です。ヘブル人への手紙 11 章 1 節はこのことをよく表わしています。この節は同義的パラレリズム(並行法)で書かれています。つまり、最初の行にある事柄が、次行では別の言葉で言い換えられているということです。1 節のみことばを見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】

信仰は望んでいる事がらを保証し、  
目に見えないものを確信させるものです。

【新共同訳】

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、  
見えない事実を確認することです。

●ここで、最初の行の「望んでいる事柄」とは、私たちが「望んでいる事柄」のことではありません。それは次の行にあるように「目に見えないもの」のことです。つまり、神の永遠の事柄であり、神のご計画にある秘密、奥義のことです。つまり、神のご計画の最終目標について確認すること、確認させるもの、それが信仰なのだ定義されています。ヘブル書 11 章には、そのような信仰によって生きた人々が挙げられています。その中のひとりに、アブラハムがいます。

【新改訳改訂第3版】ヘブル書 11 章 8～10 節

8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束とともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

10 **彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。**その都を設計し建設されたのは神です。

●特に、注目すべき点は太字の部分です。「彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいた」とあります。この「都」は、神のご計画においては「エルサレム」以外にはありません。「エルサレム」こそ、神のヴィジョンの中心地であるからです。そこに彼は自分の相続財産を受け取るべき地として確信したのです。その確信は、イサクにも、ヤコブ(イスラエル)にも受け継がれたのです。少なくともアブラハムから三代目までが記されていますが、その信仰は神の恵みによって受け継がれてゆくのです。都は彼らに対する神から受け継ぐべき信仰の遺産だったのです。なんとスケールの大きい信仰かと思いますが、私たちに与えられている福音は、すべて神のご計画が完成されるときに完全に賦与されます。そのことを思う時、私たちは永遠の神のご計画と神のみこころ、そして神の御旨とその目的を知って、そのことを信じる信仰が不可欠です。なぜなら、信仰とは目に見えない永遠の神のご計画の実現を確信させるものだからです。それゆえ、私たちは、パウロのように「**見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、目に見えないものはいつまでも続くからです。**」(Ⅱコリント 4:18)と言わなければなりません。



### 3. キリストの使節としての「和解の務め」

●「見えないものにこそ目を留める」ことで、神のご計画と神のみこころ、さらに神の御旨とその目的が見えてきます。パウロはそこから神の福音、ならびに神の和解の務めを果たそうとしました。神のご計画の最終目的は、パウロが述べているように、「いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方(=キリスト)にあって、**一つに集められること**」(エペソ 1:10)です。これを別のことばでは、「**御国を受け継ぐ**」とも表現されます。

●私たちが神の福音を伝える時に、神のご計画の全体像を知っておくことはとても重要なことだと考えます。なぜなら、それは分別をもって福音を正しく間違いなく伝えることになるからです。美しいパッケージで包んだ福音はやがてそのもろさが露わにされます。どこかズレたままの信仰で終わってしまうことも少なくないと感じます。もし、「イエス様がしたように福音を伝えましょう」と言うからには、それはイエシュアやその弟子たちが、そしてパウロが語った福音が、すべて「目に見えない」永遠の神の奥義から語られていることを心に留めなければなりません。とすれば、すぐには理解できないことも多いのだと思います。真の意味で福音を分かりやすく語るということは、実はとても難しいことなのです。神の奥義に目が開かれ、神の秘密を知った者でなければ、それを正しく伝えることができないはずなのです。乳児食のような柔らかいものを食べては成長しません。成長(成熟)するためには、堅い食物を食べられるようにしなければならぬのです(ヘブル 5:11~14)。それはいつの時代においても、教会における大事業(難事業)ではないでしょうか。

●Ⅱコリント書 5章 19節にある「和解の務め」も、神の全体的な視座からなされなければ、単に、「神と人、人と人が、民族と民族とが、国と国とが良い関係を持つという意味での和解」のレベルで終わってしまいます。キリストの十字架の死による身代わりの死によってなされた神の和解があっても、キリストの復活によって啓示されている「復活のからだ」(朽ちないからだ)への期待が希薄なのはなぜでしょうか。神のご計画によれば、完全な和解も、朽ちない復活のからだへの期待もキリストの再臨なしには実現不可能ですが、それに対する渴望が希薄なのです。

●和解の務めとは、単に、神と人が、人と人が仲良くなるための表面的な務めではありません。神の隠された事柄に関する務めです。パウロはエペソの教会の長老たちに対して語った訣別説教の中で、「主にある者たちに御国を継がせるために、「御国の福音(神のご計画の全体像)を余すところなく知らせておいた」と述べています(使徒 20:27)。私たちが神の福音を伝える時に、「目に見えない」永遠の事柄を余すところなく伝えているかどうかを、日々、丹念に点検し、検証する必要があります。そうでなければ、信仰がどこかで歪んでしまう懸念があるからです。今までやってきたことを否定されたり、修正を迫られたりすることはだれにとっても快い事ではありません。不快なことです。しかし神の事柄に限っては、常に謙虚でなければならないはずで

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

●今、この時代、福音宣教の働き以前に、私たちが語ってきた福音が果たしてイエシュアが語った福音なのかどうか、初代教会が語った福音であるのかどうかを点検する必要があるのではないかと考えます。パウロは「私たちはキリストの使節」(Ⅱコリント 4:20)だと語っています。とすれば、なおさらのこと、イエシュアが語った福音、その弟子たちが語った初代教会の福音、そしてパウロが語った福音が、今日においても同じように語られているのかどうかを検証することがあってもおかしくありません。むしろ、今日のキリスト教会の現状はその必要に迫られていると信じます。単に、多くの人を救うために人間的に操作された福音ではなく、あるがままの御国の福音とは何か、です。そのためには私たちの理解の型紙がこれから多く破られる必要があります。「私たちは、真理に逆らっては何もすることもできず、真理のためなら、何でもできるのです。」(Ⅱコリント 13:8)。自分の理解の型紙が破れることを恐れずに歩む者でありたいと思います。

2015.11.29